

高島市の明治維新

明治の始まり

今年2018年は明治維新からちょうど150年にあたる年で、各地で記念行事や当時の状況を伝える展示会などが開催されました。

明治元年となった1868年は、1月に戊申戦争の始まりとされる鳥羽・伏見の戦いが起こり、4月には、江戸へ進撃した新政府軍が江戸を無血占領しました。7月に江戸が東京と改称され、9月には元号が「明治」となりました。東北では旧幕府軍の反乱が続く一方で、新政府は外国との修好通商を進め、新しい時代の体制作りが着々と進められていきました。

このように明治元年は旧幕府軍の反乱の鎮圧と新政府の始動によって幕が開きましたが、当時、高島市域に住んでいた人々は、この明治維新をどのように感じていたのでしょうか。

今津村に残る記録

旧今津町役場に残されていた明

治時代初期の行政記録を見てみると、明治元年（慶応4年）1月、金沢藩領であった今津村に、旧幕府軍を支援するための出兵や、金沢から派遣された役人の食料手配等が命じられ、実際に今津村から京都に93人が遣わされました。さらに同じく金沢藩領であった弘川村、海津中村町を含めた3村には、「急な事情のため」という理由で御用金の差し出しが命じられました。

当時の村人たちにとって、京都の情勢はまだしも、江戸城が開城したことや年号が「明治」になったことが身近な出来事であるとは考えにくく、恐らくは、江戸時代以来の領主からの命令で、都の緊迫した情勢を感じ取ることが、最初に感じる明治維新であったのではないかと考えられます。

大溝藩主から大溝藩知事へ

また、市内では唯一大名領主の本拠地であった大溝の地では、藩主の言葉や立場が、人々の暮らし

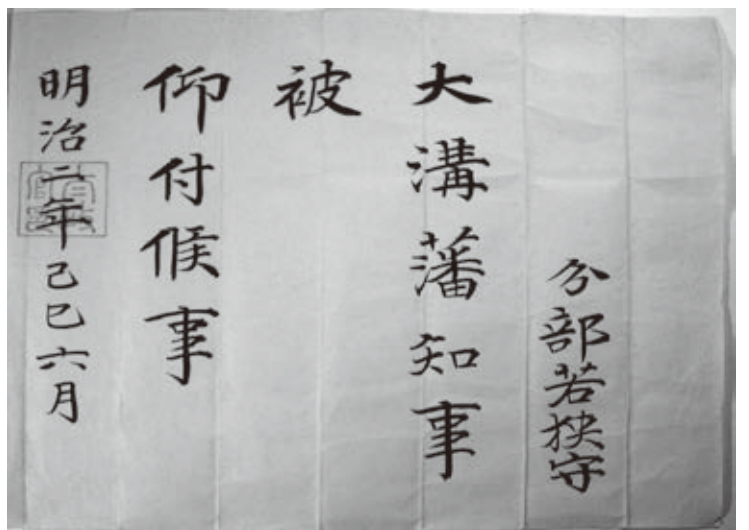
に影響を与えていくことになりました。

この時の大溝藩主であった分部光貞は、幕末から禁裏（御所）の諸役を多く勤め、皇女和宮の江戸降嫁の行列警護や洛中警備の仕事にあたりていました。そうした経緯からか、早い段階で倒幕の立場を明確にし、明治元年10月には、新政府の方針に合わせて、大溝藩の藩政組織の改革に取り組み始めました。

翌明治2年（1869）6月、藩主が領地・領民を天皇に返還する版籍奉還が決定すると、光貞は直ちに奉還の手続きを進め、同月22日には、大溝藩知事となりました。この時光貞は、解藩後の藩士の動揺を配慮してか、幕政が終わり、新しい時代になったことへの自身の考えと、分部家への協力と藩士の進むべき道を論じた「告諭文」を記しています。

大溝藩士達は、藩の解体というこれまでに想像もなかった大きな出来事を、藩主自らの文章で現実として捉えていったのではないのでしょうか。

閩文化財課 ☎ (32) 4467



藩知事を命じられた「藩知事辞令」

編集感

皆さん、朽木おにゅう峠の紅葉と雲海は見に行かれましたか？

11月3日（土）に雲海が発生する気象条件と紅葉の見ごろが重なり、おにゅう峠には全国各地からフォトグラファーが集まっていました。

日の出とともに歓声があがり、一斉にシャッター音が響き渡りました！私も撮影に成功しましたが、それよりも、住民であることに誇りを感じた最高の瞬間でした。見に行けなかった方は、公式インスタグラムなどでも紹介していますので、ぜひご覧ください！（Y）